

一條ハ一篇ノ綱領ニシテ、以下ノ數條ハ其目ノ如シ、國本ヲ立ルトハ皇國ノ本體ヲ動搖セシメザルヲ云、本體トハ則皇統一系萬古革命ナク、綱常明カニ禮儀ヲ崇ヒ、廉耻ヲ重シ、民心ヲ維持スル正ニシテ且大ナル者ナリ、紀綱ヲ張ルトハ綱ハ網ノ大繩、紀ハ繩中絲縷ノ目ニシテ、其大ナル者ヲ張リ其小ナル者ヲ治ルヲ云也、今ヤ洋說橫行將ニ國本ヲ傾敗スルニ至ラントス、是ヲ以更ニ紀綱ヲ

歴 史 の 研 究

究 (下)

文學博士 新 見 吉 治

三 應用史學は純正科學

修史家は過去の事實を只有りのまゝに傳へて居るものではない、その記述するところの事實について、偶然に起つたとか、神の思召によつたとか

張リ皇國ノ基礎ヲ確定スベシ云々」とある。島津久光公實記

以上二三の問題を中心として國體擁護運動の一片鱗を記述したのである。明治初年の世相に光明面と暗黒面の存することは三浦周行先生の常に説かるゝ所であるが、此の一篇の筋の如きも亦其一例に當ると思ふ。誠に驚くべき世態混淆の時代であつた。

何々といふ原因があつたとか、何とか角とか理屈をつけて事實と事實との間の連絡の説明を試みて居る。修史家に何等かの歴史觀——歴史哲學——を持つて居ないものはない。歴史哲學といふ銘は

打つて居なくても、修史學の發生と同時に歴史の哲學は存在したのである。之がために史書は讀者に史實の知識だけを與へるを以て満足してはゐない。必ず史實を構成する理法に關する知識をも與へんとして居る。そして尙ほ道德上の見地より、或は宗教上の見地より、或は學術上の見地より、其他種々の見地より過去の出來事について論斷を下して居る、史論の加はらぬ史書は皆無であるといふてよい。明らさまに論斷しなくても、述べらるべき史實の取捨選擇に當つて史論が加へられて居る。

史家は過去の事實全部を細大洩らさず記述するものでない。何等か標準とする價値の尺度があつて、之によつて記述すべき史實と記述すべからざる事實との判別をなして居る。史書によりて應用知識を得んとするものはそれがため勢ひ多讀を要する。東西古今の史書を通じて、東西古今の歴史

に通せざれば、普遍的の歴史法則を歸納することには出來がたい。この點に於て日本の學者は、西洋學者よりも長所を有つて居る。日本の學者は支那の史を讀み、國史と比較した。西洋の學問が輸入さるゝに及んで西洋史をも讀んだ。そして東西洋を通する歴史の理法あるべきことを信じて疑はない。然るに西洋では古くはブルタルユスのギリシヤ・ローマ二國の人物について比較評傳の如きがあるが、最近まで東洋の歴史に暗かつた爲めに、東西洋の歴史が類似した經路をたどつて居るなどいふことは夢想だもしなかつたのである。近代の大史家ランプレヒト先生でさへ、ドイツ史と日本史との比較研究を主唱せられたのは、一九一〇年十月三十一日ライプチヒ大學總長就任式演說に於ていあつた。ランプレヒト先生はこの比較研究を史學の新傾向であるやうに唱へて大學の改造まで叫んで居らるゝが、吾々日本人には何等新傾向

とも思はれない。なほ一九二三年四月ベルギー國ブリュッセルに於ける萬國史學大會席上ビレンヌ教授は「最近世界の大事變により歴史家にとりては恰かも地震學者に地震が與へたやうな問題が提起せられた。即ち歴史家は從來見ざる問題に當面することゝなつた。從來確立したる學說を打破ぶる事實が起つた。或る種の科學的偏見を覆へした。殊に人種に關する偏見を覆へした。吾人は最早歷史的現象の説明として、人種を持ち出すことは出来ぬ。……文化國民の一般の發達は共通の法則に従つて居る、若し吾人が此法則を説明する爲に人種といふ要素を引張つて來やうとするならば、未知の事を未知の事によつて解釋せんと企つるものである。國民的個性の問題は比較的方法で研究せられねばならぬ。一國民の歴史は人類の歴史の着眼點より研究せねばならぬ。大なる全體の一部として考究せねばならぬ。」といふやうな意見を述べ

べた。我が國の學者が昔は支那史を以て溫故知新の資料とし、維新後は西洋の歴史によつて我が國民の進むべき路を知らうとして居る態度から考へて見たとき、西洋學者の覺醒の遅いのを怪しまざるを得ぬ。

比較研究の範圍が廣くなればなるほど、人類の歴史に於ける普遍的現象が明になると同時に、又國民の特殊性も明かになる。自國の歴史にのみ特有の事と思つて居る事が、外國史にも現はれて居る事を知つて、人種的偏見を去り人類の性情が一樣であることを歸納し得た現代の開けたる西洋學者は我が謂ふところの讀史學を純正科學の地位にまで築き上ぐることに異議を述べ得ないであらう。

古今東西の歴史に通ずる普通の法則を抽象してこれによりて將來を推すことの出来るやう研究の歩を進むることが、これが純正の史學であり、讀

史學の進むべき道である。近代の歴史哲學者の謂ふところの一回限りで繰返さざる事實を研究するは修史家の仕事である。歴史、理論、歴史法則の研究は修史家の記述を史實の真相を得たものと假

想して、その研究を進めて行つてよい。ベルンハムの所謂發展的歴史が史學であり、科學であるといふは、修史家が理論的考察を試みて居るからである。けれども修史家は矢張り何處までも叙述的である。歴史理法の適用を試みて居るだけである。私のいふ研究は具體的記述から理論を抽象することを主としたと思ふのである。但し理論を抽象して仕舞つたらば、歴史の範圍を脱して、國家學となり、社會學となり、政治學となり、經濟學となり、宗敎學となり、民族心理學となり、其他種々の科學となつて仕舞ふぞといふ異論が起るかも知れぬ。併し私はあらゆる方面を綜合した歴史一般に通ずる純正史學といふ科學が成立し得る

ことを信じたい。

歴史は不斷の變化である。その變化は如何なる方向に進むか。之を豫測することが出来たらば史學は完成する。

私は矛盾對立の原則と妥協埋め合せの原則といふことを唱道したい。凡ての制度、文物、思想行為の變化する方向は一の極端より他の極端へ向て進み、復た元の方向へ逆戻りすること、恰かも時計の振子が左右動をなすが如くであり、又波浪の上下動をなすが如くである。歴史現象の矛盾對立は物理學の動反動の對立、遠心力、求心力の對立の理によりても説明することが出来る。チエーネー氏が民衆化の法則といふことを説いてをるのは米國人の國體觀から割り出した僻見であつて、貴族制度や君主制度を惡制であるとする偏見がある。政治上に於ける民衆主義の對立は個人專制主義である。

私は矛盾對立の原則と妥協埋め合せの原則といふことを唱道したい。凡ての制度、文物、思想行為の變化する方向は一の極端より他の極端へ向て進み、復た元の方向へ逆戻りすること、恰かも時計の振子が左右動をなすが如くであり、又波浪の上下動をなすが如くである。歴史現象の矛盾對立は物理學の動反動の對立、遠心力、求心力の對立の理によりても説明することが出来る。チエーネー氏が民衆化の法則といふことを説いてをるのは米國人の國體觀から割り出した僻見であつて、貴族制度や君主制度を惡制であるとする偏見がある。政治上に於ける民衆主義の對立は個人專制主義である。

治者被治者は對立すべきものである。その立場は矛盾してをる。而かも之が協調をはかつて行くところに安定がある。治者被治自體の變化によつて勢力關係に變化が生ずる。政治の形からいへば治者が一人なる君主制から少數の貴族政治を経て民衆主權の共和制に進化するが歴史の法則であるかの如く考へるは、米國思想である。又産業上のデモクラシーなごゝ稱へて經濟上でも少數の資本家に經濟生活を支配せしむるは、社會の不利益であるかのやうに論ずることが現代思潮であるが、是は只一面の發達をのみ見た論である。共和國では主權が人民にあると考へて居るけれども、實際は大統領が一人で行政を統べて居る。米國の政黨には首領とか總裁などいふものはないけれども、ボスといふものが出來て居る。デモクラシーであるべき米國議會には委員制度が發達して少數の専門家に決議權が委かされたと同然になつて居る。

米國憲法の運用も近時次第に專制化しつゝあるやうだ。國會議員の選舉權は英國に於ける如く段々擴張せられて普選となるが大勢であるかの如く思はるゝが、その窮極は議會不信任を意味する國民一般投票制度の採用となりて、單に賛否を表すだけの參政權となり、其裏面には發案者一人乃至少數の意見といふものに追從するか、せぬかの問題となる。ローマの歴史に於て貴族平民の同權となりてより後、貧富の争となり、平民黨の領袖が三頭政治から獨裁政治を造りあげ、共和國の名義の下に帝政々治を築きあげたるやうな反動が將來起らないまでも、その方面に向つて近世のデモクラシーが逆轉しつゝあることを私は認める。水の低きにつくは眞理のやうなれども、之をせき止めたらば水面は段々昂まりて逆流するやうになる。或は噴水の作用も起し、或は氣壓のないところへは吸ひ上げらるゝこともある。米國人は自由平等

を國是とするけれども、社會主義者の理想とするが如き、平等の生活を實現せんとは決して考へて居らず、各人に立身出世の機會を均等に得させた

いといふことを理想として、各人地位の向上に努力しつゝある。米國にて近來家系研究の如きことが流行の兆あるに徴しても、又米國民が勞働者の生活低下を阻止せんがために移民防止策を講ずるが如きに徴しても、米國民の貴族化傾向を卜することが出来る。思想の上からいへば、理想主義と實現主義との對立も進歩主義と保守主義との對立も一進一退の關係にある。儒教でいふ天理と人慾との對立の如き、江戸時代の思想に於ける義理と人情との對立の如き、人間の行動を左右しつゝあるものである。動搖の激しく大なるときは影響が大である。歴史上の變化としては寧ろ壓ふべきことに屬する。

妥協埋め合せの原則といふものは、矛盾したる

作用が相牽制して中正を得たるところに安定があるといふのである。儒教に中庸の道といふものは是である。

廣瀬淡窓、旭莊といふは性格の異つた兄弟であつた。弟の旭莊は無遠慮で大食であつた。其子林外を戒めて、徳は遠慮の二字に始まり、養生は寡食の二字より始まるといふた。兄の淡窓は旭莊とは打つて變つて遠慮勝で且つ小食の人であつた。

甥林外を養子とし之を戒めていふ、徳は無遠慮に始まり、養生は大食に始まると。林外は何れに従つてよろしきかに迷つたことゝ思はれるが、淡窓旭莊の二人が各自己れの弱點を知り其子をして覆轍を踏ませないやうにといふ考から出た警句と思はれる。個人々格の修養に於て此の如くにして埋め合せの原則が行はれる。自由のアメリカ合衆國に於て自覺した服従を教へ、服従に慣れた我が國民に自由や權利思想を鼓吹せなければならぬ所以

もこゝに存する。然るに我が國にては今や自由や權利の藥が稍々利きすぎたやうな感じのすること、安定すべき地位を通り過ぎたるが故に、更に復び服従の方向に引き戻さるべきであるやうに思はれる。

西洋封建時代の國家的結合は遠心力が作用らき過ぎて殆ど解體されて居たが、ローマ法皇によりて西洋全體は宗教的に統一されて居たことは、求心力によりて埋め合せがついて居たといふことが出来る。法皇は無力であるが、破門の脅威によつて埋め合せをつけて居た。

四 讀史より修史へ

史書を讀むこと二三なるとき記事に出入があり異説があることに氣がつく。これが解決は新らしい研究を要する。乃ち史料を蒐め事實を考證するところの修史事業となる。史實の眞否は史書の多數決では決することの出来ぬものである。史書の

系圖調べをなして史料の批判解釋にまで遡らねば決定の出来ぬものである。同一の史料についても史家の學識才によりて解釋が異なる。史書に異説が起るは自然である。史實の連絡綜合の方法についても相違が起り、異説を喚起する。所謂史實の解釋に異同が生ずる。

修史家としての研究題目を捉らへることは讀史家の能くするところである。科學の研究に於ても先づ研究題目に關する文獻の蒐集調査が必要であるが、修史家もまた史料の蒐集の前に、文獻即ち史書の蒐集と讀破が必要である。既成の史書に書かれてある事實に新しい解釋を與へるとか、或はまだ書かれてない事實を史料から搜し出して書いて見るとかいふ事でない限りは修史家の研究とはならぬ。單に讀史家の仕事として終るのみである。既成の二三の史書に記載された事實を基礎として新しい見解で組合せて新しい形の史書と

することも出来る。別に新しい史實を發見したといふ功は無きも、因果の絡み合せにおいて新解釋を施したものは、立派な新しい研究だといひ得る。若き研究家は從來多く研究せられた問題については新研究の餘地がないかのやうに考へ易いが、事實の解釋をかへることによつて、觀察の立場をかへる事に由て、新研究の餘地は常に殘されてあることを發見する。

史料が多く發見せらるれば、發見さるゝほど、史料相互によりて解釋がなし得らるゝから、考證が便利になり、正確になる。それと同様に、史實の解釋も考證が多くなれば多くなるほど進歩する。近頃は經濟學者が經濟史の研究をなし、法律家の法制史研究、文學者の文學史研究など各専門學科の範圍に於ての歴史研究が盛んになつた。それがために専門史家の研究の分野が狭くなつた觀があるが、是は却て喜ぶべき現象であつて、いくら各

専門學科の歴史が完成しても、綜合史家の研究領域が侵蝕し去らるゝものではない。綜合史家は、美術史、社會史、經濟史、法律史、文學史、宗教史など各分科の歴史を列べてそれで満足すべきものではない。各分科の歴史が完成したら、それを統一的見地から見直して新しい解釋をつけて書きあらためるべきである。此統一的見地を何處に求むべきか、修史家の見識の分るゝ處であると思はれる。

私は大學一年生の時進級試験の論文課題として田中義成先生から「東山時代美術發達の原因」といふを課せられた。當時私は史論的研究といふことに興味を有つて居たゝめに、この題目について、先づ普遍的因果論を案出した。曰く一般に美術發達は奢侈の結果だ。とそこで義政の日常奢侈に耽つた事蹟を先生から承はつた記録類から抄録して二三項に分類して答稿を作つた。今は甚だその一

本調子の研究法の不當であつて考證になつて居なかつたことを恥ぢて居る次第であるが、近代經濟史とか社會史とかいふ方面の新研究に於て、私の無謀な史論的研究に類した研究法が行はれて居る傾向はないであらうか。大正十五年十一月一日發行の社會學雜誌に若宮卯之助氏が日本社會學の意義と題する論文を寄せ、日本特殊の史實を研究調査して日本的社會學を樹立すべきことを唱道せられて居るのは、從來社會學の原理原則と稱せらるゝものが、西洋の史實だけから歸納した特殊性のもので、日本社會形式に當蔽まらぬことを喝破せられたものである。マルクス唯物史觀の流行によりて近頃は階級反目鬭争の跡を研究することが流行する傾があり、百姓一揆の研究などが興味を惹くやうになつたが、私は我が國に於ける政治方針の農民擁護にありし事實及び諸階級の協調融和、相互扶助の事實を没却することの譏なきかを憂ふ

るものである。

要するに歴史事實は錯綜して居る。科學的研究は常に單純化した知識を求めんとするが、その研究法は局部に偏して全般の知識を缺く弊がある。ドイツの大學にて演習指導は小さな問題を捉らへてやつて居るが、教授の講義は大抵概説を旨とするが如き、この邊理め合せの原理を加味して居ることゝ察せらるゝ。

讀史と修史とは二にして一、一にして二である。修史家には讀史をすゝめたい。讀史學をすゝめたい。